

## 古代日本語の「あそぶ」

## はじめに

(1) ゆふつくる しなの原に や 朝たづね……

朝たづね ましも神ぞ や あそべあそべ あそべ……

朝たづね きみも神ぞ ましも神ぞ……

きみも神ぞ や あそべあそべ あそべあそべ……

(神楽歌)

梁塵秘抄までの古代の歌に接して、しばしばある種の意味把握のほどかしさを覚えることがあるのは、単に用例が少なくて意味のとりにくい語があるからというだけでなく、当時の人々にとってはいうまでもない、共通の意識や感覚が、現代ではもう喪われているからであろう。右の歌もまた、そうしたもどかしさをどこか覚えるものである。「ゆふつくる」という枕で「朝たづね」の「朝」をきわだたせ、「ましも神ぞ／きみも神ぞ」だから「あそべ／／／／」というこの歌からは、「朝から遊ぶのは神ゆえこそだ」といった語調も感じられる。何よりも神こそが、古代「あそぶ」者であったのだろうか——。

神楽歌には、右以外の歌にあと六例「あそぶ」あるいは「あそび」という用語があるが、歌の性格もあって、「あそぶ」主体は、やはりおおむね神々とみられる。

\* 木 村 紀 子

(2) 梓弓 春來るごとに すめ神の 豊のあそびに あはむとぞ思ふ  
 (3) 豊へつひ みあそびすらしも ひさかたの 天の河原に ひさの声する  
 (4) ひさかたの 天の河原に 豊へつひ みあそびすらしも ひさの声する  
 (5) ささの葉に 雪ふりつもる 冬の夜に 豊のあそびを するがたのしさ  
 (6) みづ垣の神の御代より ささの葉を 手ぶさととりて あそびけらしも  
 ところが、つぎの一例のみは、「あそぶ」主体が明らかにひとである。

(7) いはひ來し 神はまつりつ 明日よりは 組の緒しでて あそべ、太刀はき  
 「すめ神の豊のあそび」は、人にとっては神を「まつる」行為ではあっても、「あそぶ」ことではないのだろうか。そうでなければ、「神はまつりつ、明日よりは……あそべ」とはいわないだろう。「ささの葉を手ぶさととりてあそぶ」のと、「太刀はき組の緒しでてあそぶ」のとは、人にとってどう違うのだろうか——。

(8) (字の名を) なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日うちあげあそぶ。  
 よろづのあそびをぞしける。おとこはうけきはらずよび集へて、いとかしこくあそぶ。  
 (竹取)

この竹取物語の「よろづのあそび」が、具体的にどんな範囲の「よろづ」なのかは、はっきりしない。一体に古代の「あそび」の用例で

は、「遊びし状」(垂仁記)をあれこれ具体的に説明してある場合はむしろ稀である。そのためかどうか、辞書類の「あそぶ」「あそび」の項は、おおむね「①神前の舞楽・②奏楽・③宴会・④狩猟……」といったふうな、何をして遊ぶかという遊び方の種類を列挙して語義だとしている。しかし、そうした説明が、近現代の辞書での一般的な他語の記述と比べても、いささかアンバランスでおかしいのは、たとえば「なりはひ」の項で、人の生業の種類を延々と列挙したりはしないし、「学ぶ」という項に、「①文を読むこと・②文字を書くこと・③算術……」などといった説明をつけたりしないことを思えば明らかだろう。狩猟が「あそび」となることもあれば、狩猟が日々の糧のためであることも当然ある。歌舞奏楽でさえ、神を「まつる」ときの、人の側としては「あそび」ではないというのが、さきの(7)のいうところではないか。

「あそぶ」「あそび」という、昔から今にいたるまでありふれて親しく、かつなくてはならなかった言葉の意味は、誰でもみなわかりきっているため、かえって客観的な説明がむずかしいのである。

一

万葉集の歌で、「あそぶ」「あそび」という用語は、仮名書き十五例、訓読される字は「遊」一字のみで、およそ二十四例ある。「遊」は他に「遊士」の訓がつけられているが、ミヤビが単独の動詞または名詞で出るのは、

- (9) 梅の花夢に語らく美也備たる花と吾れ思ふ酒に浮かべこそ (八五二)  
 (10) 足引の山にし居れば風流なみわがするわざをとがめたまふな (七二二)  
 の音・訓各一例だけであり、二十四例の「遊」のうち文脈からいって、ミヤビとも訓めそうなものは、

- (11) 世の中の遊道に冷しきは酔ひ泣きするにあるべかるらし (三四七)  
 (12) 海原の遠き渡を遊士の遊を見むとなづさびぞ来し (一〇一六)  
 の二例くらい、他は「アソブ」以外の訓は考えにくい。具体的な用例は追って挙げるが、天皇の行為にかかわる四例以外のものは、一見現代語の用法とさほど差違なく使われているようにみえる。ともかく、「あそぶ」「あそび」の正訓字は、万葉集ですでに「遊」に固定しているとみてよいだろう。

- 他方、古事記での仮名書き例は、  
 (13) 恐し。我が天皇、猶其の大御琴阿蘇婆勢。  
 の本文中の一例と、歌に、

- (14) やすみしし わが大君の 阿蘇婆志し 猪の…… (下・雄略)  
 (15) 潮瀬の なをりを見れば 阿蘇毗来る 鮪がはた手に つま立てり見ゆ (下・清寧)

の二例がある。また、本文中の「遊」字は十三例みられるが、そのうち、

- (16) (天皇) 其の御子を率遊之状は、…… (小舟を) 倭の市師池・輕池に浮け、其の御子を率遊。 (中・垂仁)  
 (17) 目弱王、是れ年七歳なり。是の王其の時に当たりて、其の殿の下に遊。余して、天皇其の少王の殿の下に遊を知らさずて……是に其の殿の下に所遊目弱王…… (下・安康)

の二か所五例は、幼児のかかわりからしても「アソブ」で訓むのが自然だろう。また「遊行」として出る

- (18) (大穴牟遲神) 麗しき丈夫に成りて出遊行。 (上・神代)  
 (19) 是に、七媛女高佐土野に遊行。 (中・神武)  
 (20) (小碓命) 其の傍に遊行、其の楽の日を待。 (中・景行)  
 (21) 一時、天皇遊行美和河に到りたまひし時、 (下・雄略)  
 の四例、および、会話中で敬辞を明確にした、

② 若し大后此の事を聞看さず乎、静遊幸行。

(下・仁徳)

の一例がある。「行」は「記では動詞の下に付いて……厚い尊敬を表わす。」ので「遊行」の場合もそう「考える余地がある。」といわれる。もしそうだとすると、さきの⑬・⑭などに照らし、「アソパス」といった訓が可能だろうか。しかし、⑱・⑳の五例いずれの場合も、文脈からは出歩く——文字どおり「遊行する」意味合で使われており、「行」のつかない他の「遊」の例(⑩・⑪など)主語が天皇の場合もある。は、どれもそうした意味は持たない。そこからすれば、これらは漢語「遊行」(ぶらぶら歩き)の意で使われたもので、そこに「あそぶ」の意味——訓をとるかどうかには問題が残るだろう。ちなみに、⑲につづく歌では、「高佐士野を七ゆくをとめ」である。

残り三例の「遊」は、まず、

⑳ (八重事代主神) 鳥遊・取魚為て御大之前に往きて

(上・神代)

とある、書紀に徴して「射鳥」のあそびをいうかとみられているもの。

㉑ 天皇は、比日八田若郎女を婚きて昼夜戯遊。

(下・仁徳)

と、「戯」の限定がついて「戯れ遊びます」とか「戯遊ます」とかと訓まれているもの。そして、

㉒ 乃ち其処に瘦屋を作りて、河筋は岐佐理持と為、鷺は掃持と為、翠鳥は御食人と為、雀は雛女と為、雉は哭女と為、かく行ひ定めて、日八日夜

八夜、以遊也。

(上・神代)

とあるものである。おそらくこれは「アソブ」で訓んでよいものだろうが、さきの⑰の幼児が「遊ぶ」というもの以外で、具体的にどのような行為をしたのかはつきりしない「遊」は、古事記中この例だけである。

ところでこれは、⑧の竹取物語の場合と、三日あるいは八日昼夜通して「あそぶ」といわれていること、祝あるいは殯といった特別の状

況であること、どのように遊んだのかは具体的に示されていないこと、などの点で、きわめてよく似ている。つまり、そのような状況で「あそぶ」といえば、どうすることかは、古代の人々にはいうまでもないことだったのだ。しかし、魏志倭人伝中には、

㉓ 始死停喪十余日、当時不食肉、喪主哭泣、他人就歌舞飲酒、已葬、举家詣水中澡浴、以如練沐。

(3)

という記事があつて、㉓の「遊」に相当するとみられる部分が、よそ目には具体的に記述されている。記紀歌謡中の「あそぶ」(アソパスを除く)は、三例のみであるが、

㉔ 潮瀬の なをりを見れば アソビ来る 鮎がはた手に つま立てり見ゆ

(清寧記・武烈紀)

㉕ 打橋の つめのアソビに 出でませ子 玉手の家の

(天智紀)

いずれも、歌垣の歌とみられ、すでに諸注にもあるように、「あそぶ」ときの具体的な行為には、何よりも「歌舞」があつたことが窺われる。歌垣(かがひ)は、風土記に、

㉖ 坂より東の諸困の男女、春の花の開ける時、秋の葉の黄づる節、相携はり駢闐りて、飲食を齋賽て、騎や歩にて登臨り、遊樂栖遲。其の唱に曰、

(常陸国筑波郡)

㉗ 杵島県。……郷間の土女、酒を提へ琴を抱きて、歳毎の春と秋に、手を携へて登り望け、楽飲歌舞曲尽きて帰る。

(肥前国 逸文)

などであり、またつぎのような祭の記事もみえる。

㉘ 年毎の四月十日に、祭を設けて酒灌す。卜氏の種属、男も女も集會ひて、日を積み夜を累ねて、飲樂歌舞。其の唱にいはいはく、

あかさかの 神のみ酒を たげと 言ひけばかもよ わが酔ひにけむ

(常陸国香島郡)

ここで注目されるのは、㉖・㉗・㉘・㉙にあるとおり、歌舞の場に

はおおかた飲酒も伴っていることである。記紀の記述でも、歌が歌われるときには、しばしば飲酒・献酒がなされており、歌そのものが<sup>③</sup>のような酒寿きの歌であることも多い。

## 二

さて、これまで見た用例のかぎりでは、人々が「あそぶ」のは、まずは、(8)いはひ・<sup>④</sup>まつり・<sup>⑤</sup>もがり・<sup>⑥</sup>春秋のかがひ、など、特定の時や場においてであった。服喪時に歌舞飲酒の「あそび」はそぐわないという現代感覚には、「かなし」「あはれ」などといった語が、古代、愛憐・悲哀いずれをも含んでいたことを思い合わせればよいだろうか。ところで、右のような特定の状況で「あそび」がなされるゆえに、ここで、

○あそびは、そも／＼の用語例では、単に魂を呼び返すわざであった。

(上世日本の文学)

○あそぶは鎮魂を目的にした呪術的動作であった。其が一つの偏向を持つて、鎮魂舞踊を行ふことを意味するやうに用ゐられた。

(和歌の発生と諸芸術との関係)

等とある折口信夫博士<sup>(4)</sup>に始まる、いわば民俗学的な「あそび」の解釈の検討が必要となるだろう。最近刊行された石上堅著『日本民俗語大辞典』の「あそび」の項は、折口説と若干ずれながら、またつぎのように述べられている。

○地方で、休み・休憩のことを、カミ・ゴトといい、オロシ・ワスレ・アソビと同義に併用しているように、もとは、鎮魂呪術を中心にする神祭り(田遊び・雑遊びなど)を行うこと。それが、祭りにかかる前の物忌み期間を、アソビ(若者組の泊り宿を、アソビイエ)と感じ、群の行動を中心にして、休み・休憩の義に転じた。(以下略)

折口博士の鋭い直感と独特の用語を背景にしたこうした「あそび」

の解釈の影響はきわめて大きく、民俗学的な分野だけでなく、多くの古典の注釈書類や古語辞典類も、以後何らかの形でそれを踏まえた記述がなされている。しかし、言葉の自然な実態に即して考えるかぎり、折口説はつぎのような疑問点を含んでいる。

まず、記紀万葉のころから現代まで、死語となることなく同じ形で使われている和語の動詞は、一般に、どこか一点の変わりぬ本義をもちつづけているものである。たとえば、「いはふ」や「まつる」は、古代と現代とですこし意味合がずれて来てはいるものの、中心にある祝・祭的意義は今も失われてはいない。ところが、「鎮魂を目的とした呪術的動作」(民俗学大辞典では「鎮魂呪術を中心とする神祭りを行うこと」と、転意させている)が本義とされる「あそび」は、すでに古代の用例で、よほどこじつけないかぎりそのような意味合との関連をとりにくいものが出る。たとえば、さきの(7)や、

<sup>⑧</sup> かの(月の)国の父母のことも覚えず。ここには、かく久しくあそびきこえてならひたてまつれり。

(竹取)

<sup>⑨</sup> あそびわざは、小弓、碁。さまあしけれと鞠もをかし。

(枕草子 二二五)

など。あるいは、「魂を呼び返すわざ」という言い方を、現代風に「くたびれた精神を活性化する行為」と言いかえるなら、一貫した本義とみられるだろうか。しかし、大方の民俗学風理解はそうではなく、むしろ呪術的な祭祀行為にひきつけているようである。

それでは、鎮魂呪術にかかわるとして、古代語で何らかの呪的意味合をもつ語音である「い・の・い・はふ・い・つく・い・む」などのイ、「ち・はふ・ち・かふ・い・の・ち・ちから」などのチ、あるいはタマなどと「アソビ」は、何らの共通音・関連音ももたないし、熟語ともならないのは、どうしてだろうか。

さて、そこで「あそび」はどのような語と形式的な関係をもつか、すこしさぐってみよう。日本語の動詞は、その基本にあるのは二音節動詞であり、三音節以上になると、語幹部分に何らかのより基本的な語基が認められる派生的な語であることがほとんどである。アソブは、三音節動詞であるが、ここでアソブと同様語尾がバ行四段に活用する三音節以上の動詞を『大言海分類語彙』から拾い、その語幹の本来の語性を横に、「ブ」がつくことによって出る意味を縦にして分類表示してみよう。

動詞性	状態詞性	名詞性	語幹				
			ブ	状態になる			
ナラ(平)ーブ ウカ(浮)ーブ ムス(産)ーブ	アサ(浅)ーブ ヒラ(平)ーブ ユル(緩)ーブ マロ(丸)ーブ コロ(転)ーブ	ツル(蔓)ーブ	ハコ(掛?)ーブ マネ(真似)ーブ イナ(否)ーブ ウソ(嘘)ーブ	タシ(足?)ーブ シノ(篠?)ーブ イク(息?)ーブ	アハレ(憐)ーブ カナシ(悲)ーブ タノシ(楽)ーブ クルシ(苦)ーブ タフト(費)ーブ	オラ(号)ーブ ニヨ(呻)ーブ	ムセ(咽)ーブ サケ(裂)ーブ アク(空)ーブ エラ(選)ーブ

これらはすべて、平安期までの文献にすでに出ているものである。なお、平安期以降四段だが古くは上二段とみられるヨロコブ・スサブは、いちおう省いた。漢字は、語幹部のみの語源的な意味をとって宛ててみた。

さて、以上の語群のどのあたりと、「アソブ」は類するのだろうか。表記のように、これらバ行四段動詞は、語幹部の語源的な意味がまったく不明のものはほとんどない。「状態になる」欄など、ほとんど漢字の意で明らかであるし、「行為をする」欄の「イナブ」から「アクブ」までは、もとは、それぞれの発声音やその印象に直接対応していたかとみられるものである。?印をつけたものも、「イクブ(償)」は、イキードホル・イキール(楳)などと、「タシブ(嗜)」は、タシダシ・タシーナシ・タシーナム・タシカなどのある充足性を表わすかとみられるタシと、「ハコブ(運)」は、ハカドール・ハカールなどのある量や距離の目安をいうハカとの類縁性が考えられるし、「シノブ(忍)」は、ホコロブ・ツルブのあり様と同じで、細くてもよくシナヒ、よく力にたえる小竹の性状を、人の心情に転化したとみることができるといえる。

そうした他語のあり様からして、「アソブ」の語幹部分も、本来ある程度単純な具体性をもった語だったのではないかと推察される。しかし、アソ(サ・シ・ス・セ)という音をもつ具体性のある語意は、「浅・朝・麻・足・声・汗」ぐらいで、一見「あそぶ」の漠然とした意味とかかわりのあるものはなさそうである。ただ一つ注目されるのは、音が一致する火の山阿蘇山のアソである。これは、景行紀十八年に阿蘇国のいわれが出、神武記には「阿蘇君」という名がみえて、「アソ」単独でも用いられたかなり古い言葉とみられるが、どのような意味をもっていたのか、文献からはまったく不明である。ただ、「ナラブ」の「ナラ」の単独形が地名「奈良」として残ったことと似た点もあり、「あそぶ」が何よりも歌舞飲酒にかかわるものとする、ふと思ひ合われるのは、アセ(汗)ともつながる、その時の身心の燃えるようなアツさである。

ところで、折口信夫『上世日本の文学』(第四—三、天鈿女命V)は、「鎮魂」といった言い方とは別に、つぎのようなくだりがある。

○日本の舞・歌・物語など、此(巫女が神として託宣を行ふ)神懸りから出て来るものが多数にある。酒が現今の様に時も処も定めず、用ゐられるやうになつては、此話も稍耳に入りにくいかも知れぬが、古代に於ては、酒の用ゐられる場合は、はつきりと定り、且、其機会も、さう度々ではなかつた。神事だけに用ゐたのである。酒を用ゐて、陶然とした境地に這入ることが、既に一つの神懸りの状態でもあつた。而も、さうした神酒を掌るのは女性であつた。……

此御酒は わが御酒ならず。くしの神 常世にいます 石立たす 少名御神の 神寿ぎ 寿ぎくるほし 豊寿ぎ 寿きもとほし 献り来し御酒ぞ。あさず食せ。さゝ (仲哀記)

歌舞飲酒にかかわる直接の用語なら、「うたふ・まふ・あふ、たのし・うらげ」といった言葉が当然ある。「あそぶ」とは、歌舞飲酒行為全体にかかわっているのだから、当然それらが一体になつたときの状態あるいは行為をいうのであろう。つまり、身も心も日ごろの本分をわすれはなれ、うっとりとなる境地、身心がアツクアセばみ、忘我のうちに歌われ舞われる、あたかも神があつた行為ないしは状態になること、それが「アソブ」であつたのではないか。あつくもえさかる神の山アソは、そうした太古の言葉のはるかな実体を今に伝えているといへば付会にすぎないだろう。

三

人は、「あそび」において非時にカミとなる。それは、人としては、やはり日々の本分からはなれたひとときのアツき状態であるだろう。⑤の「遊」の古訓にある「カミゴト」、あるいは今も特定地域に残る「カミゴト||休日」とは、「神事」と字を宛てると意味が曖昧になる。

それは、「鬼ごと(ごっこ)」「ままごと」のゴト、「道の後こはだ処女を神のごと(如)聞えしかども」(応神記)の、コトならぬゴトであつただろう。(1)「ましも神ぞ／きみも神ぞ」さあ「あそべ／く」とは、いわば「神ごと(ごっこ)」のセリフではないか。「あそび」と「ごと(ごっこ)」とは、今も子どもの世界では同義的である。

人は、また、神に、御酒を供え歌舞をあげる。そうすることが「神のよろこび給ふべきこと」(源氏 潘標)だからである。「あそぶ」とは、すなわちカミの行為そのものであつたゆえに。したがつて、(13)・(14)の「アソバス」、あるいは、

(13) をす國の 遠のみかどに 汝らが かくまかりなば 平らけく 吾れは 將遊 手抱て 我れはいまさむ 天皇われ うづのみ手もち かきな でそ ねぎたまふ…… (万 九七三)

(14) ……吾が思ふ 皇子の命は 吞されば……因見所遊……み雪ふる 冬の朝は さし楊 根はり梓を おほみ手に とらしたまひて 所遊 我が王を…… (万 三三三四)

などと、古代まず大君の行為のみについて使われている「アソブ(アソバス)」は、「高光る日のみこ」たる大君の行為は、すべて「神ごと」つまり「あそび」であるとみなしての言い方だろう。だからこそ、大君もまた、

(15) (吉野の国主等) 吉野の白礪上に、横臼を作りて其の横臼に大御酒を醸み、其の大御酒献る時、口鼓を撃ち、伎為て歌ひて曰、

かしのふに 横臼を作り 横臼に かみし大御酒 うまらに きこしもち食せ まろが父 (応神記)

(16) 是の口、活日自ら神酒を挙げて、天皇に献る。仍りて歌ひて曰、この御酒は わが御酒ならず やまとなす 大物主の かみし御酒 いくひさ いくひさ (崇神紀)

と、みきを、そして歌や伎をたてまつられるものであつた。あるいは、

何よりも大君みずからが、

38 而るに介胃の士、疲弊無きにあらず。故に、聊に御謡を為して、将卒の心を慰めたまふ。謡ひて曰はく、

たたなめ いなさの山の 木の問ゆも いゆきまもらひ……

(神武紀)

39 天皇……群臣に詔して曰はく「朕が為に蜻蛉を讀めて歌賦せよ」と。群臣能く敢へて賦む者莫し。天皇乃ち口号して曰はく

やまとの をむらの嶽に 猪伏すと たれかこの事 大前にまをす……

(雄略紀)

40 天皇、泊瀬の小野に遊ばす。山野の体勢を視して、慨然感興、歌ひて曰はく、

隱国の 泊瀬の山は 出でたちの よろしき山……

(同)

と、「慨然感興」「乃ち口号」よく人の心を慰める、ひいでて即興の歌の名手であった。けだし、太古、この島にすむ人々の「おほきみ」たる者は、すぐれて「あそび」の能者だったことで「神にいまし」たのである。

けれども、「あそび」は、

41 百しきの大宮人のまかり出て遊ぶ、今夜の月のさやけさ(万 一〇七六)

42 海原の遠き渡りを遊士の遊を見むとなづさひぞ米し(同 一〇一六)

43 漢人も筏浮べて遊ぶと云今日そわが背子花かつらせな(同 四一五三)

などというように、文献中の漢人の遊楽気分を知り、それに準えたいとする「いとまある」大宮人たちの中で「宮び」ゆくにけれ、しだいにその歌舞飲酒一体の神がかりの熱気を喪失し、意味を分化・屈折させてゆく。

万葉集の「あそぶ」の用例は、その半数以上が、大伴旅人・家持周辺のいわゆる宴歌である。それらは、

44 梅花咲きたる園の背柳をかつらにしつつあそびくらさな

45 黄葉の過まく惜しみ思ふどち遊ぶ今夜は明けずもあらぬか(卍老之宅宴歌 八二五)

(家持 一五九一)

と、季節の節目、あるいは梅・よもぎ・あやめ・橘の実などを「かづらきあそぶ」といったあり様、また「思ふどちあそぶ」「たづさはりあそぶ」という言い方に、どこかがひの風情ものこしており、具体的な行為はほとんどの場合歌舞・飲酒の範囲と解することも可能ではある。ただ、

46 かくしつ遊ぶ飲みこそ草木すら春は生ひつつ秋は散りゆく

(大伴坂上郎女 九九五)

と、あえて「飲み」を「遊び」とわけた言い方は、

47 菊の花うつろひさかりなるに、紅葉のちぐさに見ゆるをり、親王たちおはしまさせて、夜ひと夜酒のみし遊びて……

(伊勢 八一段)

と、平安期に統いてもいて、「あそび」の内容から「飲酒」行為は分岐させる意識が、万葉時代すであつたということだろう。むろん、飲酒も、

48 世の中の遊の道に冷しきは酔ひ泣きするにあるべかるらし

(旅人 三四七)

と、「あそび」一般でなくなつたわけではなかつた。しかし、それは、平安公家の世界では、管弦・舞楽の宮びた遊楽気分の「あそび」とは別の、

49 物くひ酒のみつるあそびもみなすさまじくなりて、ひとりたちふたりたち、みなたちていぬ。(宇治拾遺 23 平安中期の語り部分)

といったやや卑俗な「あそび」にすぎないものだったようである。

ところで、「遊楽」の「楽」は、万葉集では「楽伎」(四二七二)と仮名が送られる例もあり、正訓「タノシ」に固定した用字(六例)とみられるが、その「たのし」は、

50 たるひめの浦をこぎつつ今日の日はたのしくあそび言ひつぎにせむ (四〇四七)

51 しなざかる越の君らとかくしこそ楊かつらきたのしくあそびめ (四〇七二)

52 年のはに春の米たらばかくしこそ梅をかざしてたのしくのまめ (四〇七二)

と、しばしば「あそぶ」ときの気分をいう用語ともなっている。

古事記の「タノシ」は、

53 この御酒の 御酒の あやにうたダノシ ささ (中・仲哀)

54 山泉に 蔭ける青葉も 吉備人と ともにし摘めば タノシクもあるか (中・仁徳)

と、歌の中に二例あるだけだが、このうち53は、やはり歌舞飲酒の「あそぶ」時にかかわっている。ところが「楽」字となると、本文の十六例中「タノシ」で訓めそうなものは一例もない。それらは、まず、神楽の始まりといわれ(梁塵秘抄口伝集)、『古事記伝』以来「アソブ」の訓ももつ

55 何の由にか、天字受売は楽為、亦、八百万神諸咲ふ。……汝命に益して 貴き神坐す故に、歡喜咲楽。(上・神代)

の二例。下巻部だけに散在して「トヨノアカリ」の定訓をもつ「豊楽」七例。さきの53の歌の後に、「此は酒楽之歌也」とある一例。あと六例は、

56 故、熊曾建が家に到りて見れば、其の家の辺に軍三重に囲み、室作りて 居り。是に御室楽為むと言動み、食物設備たり。故、其の傍に遊行して、 其の楽日を待ちたまふ。余して、其の楽日に臨ひ、……熊曾建兄弟二人、 其の嬪子を見成で、己が中に坐せて盛楽。故、其の耐なる時に臨ひ…… (中・景行)

57 其の国の人民、名は志自牟之新室に到りて楽。是に盛楽、酒酣にて次第

に皆舞ふ。

(下・清寧)

の二か所に見える。この56・57の状況が「あそび」に相当するのは一見して明らかであるが、「楽」のこれまでの訓は、ウタゲかエラキ(キ)かである。しかし、右にみられるとおり「楽」は、a・b・cは名詞的用法、d・e・fは動詞的用法とみられるから、ウタゲでは動詞的使用が苦しく、エラキは、名詞として「エラキの日」などとは何とも熟さないし後の用例もない。また、ウタゲの訓はd・e・fと似通った用法である55の場合には、統一的にあてにくい。だが、これらを「アソブ・アソビ」で訓むなら、きわめて自然にすべて統一して訓むことができるだろう。古事記の中で、「愁・患(ウレヒ)」「寿・命(イノチ)」「遊・楽(アソビ)」などは、異字同訓の可能性があるとはいわれてもいる。<sup>(10)</sup>

さて、「豊楽」の場合も、(3)・(4)の神楽歌の用語から推して「トヨノアソビ」という訓も可能だろう。古事記には別に「豊明」という表記で明らかに「トヨノアカリ」と訓める場合が二例あり、うち一例は、下巻履中記で「為豊明」「為豊楽」と同語法で並存している。いずれもトヨノアカリと訓ませるつもりなら、なぜ同一表記にしなかったのだろうか。そしてまた、「豊楽・新室(御室)楽・酒楽」が、従来すべて別訓というのはいかがだろうか。

#### 四

「あそぶ」とは、なるべく古代の用語に即しているなら、「神のごとく、あやにうただのしくなることをする」ことである。人は、いつでも神のごとくなれるわけではなく、折々の祝いや祭りなど、神々により身近にいます時、ふとその気分に参加できるようにすぎない。大宮人が「いとま」をもて余し、



⑧ かたはなるまで、遊びたはむれつつ暮らし給ふ。(源氏 浮舟)

と、それを「あそび」でうめるなら、「あそび」は神々からは遠のき、単なる「遊楽」気分に頹落する。一方で神々と共にあるべき「あそび」は、気のはる儀礼に形骸化し、「いはひ来し神はまつりつ……明日よりは遊べ」と、あらためて人だけの息抜きの「遊び」が必要となるだろう。平安宮廷の神楽とは、あくまで「神のあそび」への奉仕であり、ゆえに文字どおりの神事なのである。

「あそび」とは、より現代の語感に即しているなら、「忘我・熱中・陶醉・愉悅といった気分を伴う、日々の本分をはなれた行為」を指している。その点において、太古の「あそび」と、現代の「あそび」とは何ら意味を転じていない。それは、日々の本分をはなれたその「うっとりした気分」こそが大切で、行為そのものを必ずしも具体的に限定するものでないことも、昔も今も同じであろう。古事記の中の「鳥遊」や「わが大君のあそばしし猪の」といった例からは、主に男たちの弓矢の「あそび」がなされたことが窺われるし、平安貴族の「あそび」は、

⑨ 琴ならはし・碁うち・扁つきなど、はかなき御遊びわざにつけても……

(源氏 橋姫)

と、管弦・舞楽以外にも、「はかなき御遊び」は多様であった。そして、具体的に何をするというのではなく、その気分のみで即して使われる例も、すでに古くからある。かぐや姫が、⑩「ここにはかく久しくあそびきこえて」と言うのは、本つ国である月の都をはなれ夢心地で居るといった気持だろう。そのような「本拠をはなれた夢心地」といった意味合において、「あそび」と「遊行」とは容易に結びつくし、「遊行女兒」が、ウカレメともアソビとも言われた(和名抄・名義抄)のだろう。むしろその遊女は、平安期「声は深雲を過め、韻は水風に

颯へり。」(遊女記)「声は頽伽のごとく」(新猿楽記)と、すぐれてよく歌をうたう者でもあった。

また、令集解服葬令にみえる、天皇崩時、殯所のごに供奉したという「遊部」。そこにみられる

⑪ 隔幽頭境、鎮凶獨魂之氏也。終身勿事、故云遊部。あるいは、

免課役、任意遊行、故云遊部。

といった釈は、おそらくは、天皇崩時の「あそび」に専従的に供奉するゆえの部曲名が、すでに奈良朝以降の貴族には、「任意遊行の故に遊部と云」といった、「遊行女婦」の呼び方とも通じる「あそび」の語感でとらえられていたことだろう。そのかぎりにおいて、

⑫ 傀儡子は定居なく当家なし。穹廬懸帳、水草を逐ひて移歩す。……課役なきを以て一生の業と為す。……(その歌声は)韓娥の塵を動かし、余

韻は梁を繞る。……

(傀儡子記)

といわれたクグツもまたアソビの徒であり、そのような課役なき遊行の人々は、足柄山の「いづくよりともなく出来たる」アソビ、「難波わたり」の水辺のアソビ(更級日記)というように、アソビという呼称において、平安公家の用語の中で容易に混交していたと思われる。そして、時として誰でもがするが、けつして一人前の人の本分ではない「あそび」を、ある特定の人々の本分的行為に限定してその呼称にするとき(源氏物語には「あそび人」といういい方もみられる)、どこかその人々を異端視した響きを持つのは、平安の昔も、今も、さほど変わらぬ。

ところで、アソビと呼ばれた水辺の遊女あるいは陸の傀儡子女などは、遊女記・傀儡子記・新猿楽記・更級日記などに見るかぎり、歌を歌うとはあっても、舞を舞うとは記されていない。しかしここに、

62) 舞の袖飄飄として、仙人の遊ぶがごとし。歌の声雅にして頻鳥の鳴るがごとし。非調子の琴の音は、地祇影向を垂れ、無拍子の鼓の声は、野干必ず耳を傾く。  
(新猿楽記)

と、歌舞奏楽一体の神がかりの「あそび」をすると記述されている者がある。「魂女」——カウナギである。院政期におけるその舞い姿や鼓を打つ様子は、後白河院による年中行事絵巻の処々に見え、

63) よくよくめでたく舞ふものは かうなき小櫓葉車の筒とかや  
64) 住吉の一の鳥居に舞ふきねは 神はつきがみ衣はかりきぬしりけれも

と、その歌声の言葉は、梁塵秘抄の神歌に残された。「神歌」とは、神ごとの歌——その身に神がついたものの歌う歌であらう。その文字面に見る内容が卑俗で神々しくないと思うのは、歌い手の神がかり気分を共感できない後世の感覚であるだろう。おそらく、古代末期のみやこ周辺では、遠いにしえの「あそび」の行為や気分は、儀礼化した宮廷神楽の「豊のあそび」よりも、

65) あそびをせんとや生れけん たはぶれせんとや生れけん  
と歌う、虫けらのように落ちぶれ軽んじられた里々の巫女たちの歌や舞に、その命脈を保っていたに違いない。

あそぶ子ども声きけば わが身さへこそゆるがるれ  
とは、すでに老いて神がかりの舞いをなしえないわが身さへ、いややはりその神つきの血をもつわが身こそ、若い巫女の鼓や歌声に、ふとおのずから身がゆらいでしまふ、ああやはり自分は「あそび(神ごと)」——歌舞をする身に生れついたのであったか、というのだろう。四句神歌には老女や尼の感慨が目立つが、「さへ・こそ」という相反する意の助詞の結合した表現は、以上のような「あそび」の理解においてはじめてよく四句神歌の中におさまる。

しかしながら、若い巫女たちのあまりにも軽やかな蝶や仙女のよう

な「まひ<sup>(14)</sup>」は、「市を成し」て見物するものではあっても、もはや太古の「あそび」のようには、ふつうの人々にその神がかり気分を共感させる力もちえなくなっていた。人々は、より激しく熱気のこもる躍動——ラドリに、集団のいわば神がかり気分、すなわち、仏教浸透後の法悦境を感じ求めたのだとみられる。  
「踊り念仏」は、そのようにして古代的な「あそび」に代わり、乱世の人々の心をとらえたのである。

## 注

- (1) 岩波日本思想大系『古事記』訓読補注(上巻六四頁四)
- (2) 他に「カミゴトス」(度会本)という古訓がある。
- (3) 注(1) 同書補注111。書紀中の天皇崩時の「乃奏三種々歌舞」(天武紀)などもひかれていた。
- (4) 全集第十二巻(上世日本の文字)・第十七巻(和歌の発生と諸芸術との関係)、その他。
- (5) 阪倉篤義『語構成の研究』(角川書店) 236—237頁。イソとイトなど、サ行とタ行とは子音が交替しうる。
- (6) 武満徹 川田順造『音・ことは・人間』(岩波書店) には、西アフリカのモシ族の言語には、「歌と、楽器の音と、踊りと、享楽の総合された状態」を指す「デーム」という語があると報告されている。
- (7) 浅間山の「アサ」も当然関連する音であろう。
- (8) 遠藤邦基『濁音減価意識——語頭の清濁を異にする二重語を対象に——』(国語国文第46巻4号)
- (9) 山崎大御琴アソバセ」が仮名書きであるのは、大君の行為をいう「アソバス」が、「遊」あるいは「楽」ではあらわせないからで、その彈琴が「鎮魂呪術のわざ」だからではないだろう。もしそうなら、函の「遊」も、当然仮名書きされてよいと思われるからである。

- (10) 小島憲之『上代日本文学と中国文学』上(塙書房) 253頁。  
 (11) 「あそび」が本分であるのは、子どもと、鳥・獸・魚たちである。とりわけさえずる鳥などは神に近いということだろう。  
 (12) 拙稿「梁塵秘抄四句神歌」(国語国文第52巻1号)  
 (13) 秘抄神歌で「あそぶ」と歌われるのは、神・人・鶴・亀・諸鳥・猿のほかは、蝶・蜻蛉・蝸牛・しらみと、虫類がきわだっている。  
 (14) 「まふ」とは、63や、「目がまう」という方言(愛媛・岐阜)があることで明らかのように、旋回することをいう。朝鮮半島に現存する巫女は、激しく旋回することで神がかるという。

(一九八四・九・二四)

## 'Asobu' in Old Japanese

Noriko KIMURA

### Summary

In old Japanese the word 'asobu' was not used to mean 'to play' or 'to be idle'.

The original meaning of this word was to fall into a state of trance through singing, dancing, and drinking.

In this essay the word 'asobi' lets us know how the ancient people felt when they held an ecstatic festival with gods.